

科学とキリスト教

小 柳 義 夫

- 1 キリスト教と科学
 - 1.1 近代科学の成立とキリスト教
 - 1.2 キリスト教と環境危機
 - 1.3 ガリレオ事件
 - 1.4 進化論
- 2 科学と価値
 - 2.1 「科学」の成立
 - 2.2 現代科学の仮説性
 - 2.3 科学と宗教との関係
 - 2.4 科学研究と信仰
 - 2.5 進化論について
 - 2.6 なぜキリスト者は進化論を嫌うのか
 - 2.7 科学と科学主義
- 3 日本の宗教事情
 - 3.1 仏教・神道・儒教
 - 3.2 神仏混淆
 - 3.3 宗教と現世利益
- 4 おわりに

1 キリスト教と科学

1.1 近代科学の成立とキリスト教

「キリスト教と科学」というと、ガリレオ事件とか、進化論だとか、数々の闘争の歴史を連想するでしょう。たしかに、キリスト教は科学の発展

の歴史の中で、非常に密接な関連がありました。注目すべきことは、キリスト教と科学との間には闘争や摩擦もありましたが、むしろ友好的な関係の方が際だっているということです。

多くの歴史学者が指摘するように、近代科学はキリスト教の影響を受けた文化(すなわち西欧文化)の中でしか成立しませんでした*1。そして両者の関係には、単なる偶然以上のものがあると考えられます。まず第一にキリスト教の一神論です。一神論は、多くの多神教の宗教が信じているような、気まぐれな神々とか、精霊とか、魔物とかを否定しました。つまりキリスト教は世界を世俗化したのです。そして、科学的な研究へのタブーを取り除き、科学的探究を正当な人間の活動として位置づけたのです。

それだけではありません。キリスト教は人間の労働を意味づけました。古代ギリシャや中国の哲学者や、多くの宗教の教師達は、精神を物質から分離し、労働を卑しいものと考えました。しかしイエスは大工の息子であり、弟子の幾人かは漁師でした。創世記の創造物語では人間が地を支配するよう命令されています。つまり、キリスト教においては、科学だけでなく技術も正当なものであり、尊厳をもったものであることが保証されているのです。

1.2 キリスト教と環境危機

しかし皮肉なことに、まさにこの理由によって、多くの環境論者(ecologists)たちは、人間の自然破壊の根源はユダヤ・キリスト教にあるとキリスト教を攻撃しました*2。ちょうどオイルショックなどで環境問題が注目された1970年代のことです。かれら(例えばLynn White Jr.)によれば、キリスト教は人間を「神の似姿 Imago Dei」として自然より

* 1 Church and Society, WCC, "Faith, Science and the Future," Preparatory Readings for the 1979 Conference of the World Council of Churches (1979).

* 2 例えば, Lynn White, Jr., "Machina ex Deo, Essays in the Dynamism of Western Culture" (1968, The MIT Press). 青木靖三訳「機械と神, 生態学的危機の歴史的根源」(1972, みすず書房)。

優位に位置づけ、自然の搾取を許し、その結果、資源と環境の危機が起こったというわけです。有名な創世記の箇所「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」(1;28b) が、環境危機の元凶と見なされています。

この「従わせよ」「支配せよ」という言葉については注意深い分析が必要です。よく知られているように創世記には二つの創造物語が語られています。一つは一章の祭司資料による創造物語で、もう一つがヤーウェ資料による創造物語(2:4 から)です。ヤーウェ資料の方が古いと言われています。前者では神の似姿 *Imago Dei* として神から創造され地上に置かれた輝かしい人間像(いわばトップダウンの人間像)が描かれています。後者では対照的に、大地の塵をもって形造られ、命を吹き込まれ、そして罪を犯すに至ったみすぼらしい人間が描かれています(いわばボトムアップの人間像です)。古代の哲学者達が *Imago Dei* としての人間観を称揚したので、キリスト教の人間観というと *Imago Dei* が持ち出されます。昨年日本のカトリック司教団が発表した『いのちへのまなざし』*3 も同様です。しかし、旧約・新約聖書全体を考えると、塵としての人間観、ボトムアップの人間観の方が大きな位置を占めています。

「地を従わせよ」という命令は、第一の創造物語の結論でありますから、技術や環境に関するキリスト教倫理を考える際には、同時に第二の創造物語のメッセージ、すなわち人間は塵であって、塵に帰ることを知らなければならないということも考慮に入れる必要があるでしょう。そうすれば、自然との共生を視野に入れた新しい環境の神学ができるのではないのでしょうか。

1.3 ガリレオ事件

もちろん、科学とキリスト教の間には闘争の歴史もありました。科学はしばしば特定の宗教的信条を攻撃し、教会はこれに反撃するだけではなく、ガリレオの場合のように科学研究を圧迫しました*4。

* 3 日本カトリック司教団「いのちへのまなざし、二十一世紀への司教団メッセージ」カトリック中央協議会(2001)。

* 4 青木靖三「ガリレオ・ガリレイ」岩波新書 576(1965)。Andrew D. White,

ガリレオはルネッサンス末期のイタリアの物理学者で、ピサに生まれ、医学を志してピサ大学に入学したが途中放棄し、家庭教師をしながら科学論文を書いて 1589 年ピサ大学数学講師に就任し、落体の実験を行いました。1591 年大学当局の権威主義を揶揄する詩を書き物議をかもしたというエピソードが知られています。1592 年パドヴァ大学正教授に就任し 18 年間在職しましたが、その間 1609 年望遠鏡が発明されたとの報を聞き、自ら製作して天体観測を行い、月面の凹凸、木星の 4 衛星、太陽黒点、金星の満ち欠けなどを発見し、1610 年『星界の報告』に発表しました。同年、トスカナ大公お抱えの数学者に任命されました。ところが、弟子に書いた手紙の改竄された写しが流布され、1615 年ローマの異端審問所に告発されました。これが「第一次裁判」です。訴訟指揮に当たったのはガリレイの崇拜者であるベラルミーノ枢機卿であったので、1616 年の判決は地動説を弁護してはならないという穏やかな訓告程度で終わりました。しかしこの判決文書はその後偽造されたらしく、地動説についての一切の言及に対する禁止命令が付加された文書が残っています。ガリレイは、『黄金計量者』（1623）を出版し自然という書物が数学で書かれていることを主張し、さらに『天文対話』（1632）を出版しましたが、教皇ウルバヌス 8 世の忌諱に触れ、異端審問所に召喚されました。その裏には、ハプスブルグ家とブルボン家の確執があったとも言われています。この「第二次裁判」において、第一次裁判の偽造された判決文が持ち出され、ガリレイが禁止命令に背いたことが問題とされました。1633 年の判決では、「太陽は世界の中心にあり、位置運動をしないという命題は、哲学的には不条理で誤りであり、形式的には明らかに聖書に矛盾するから異端である。」と断じられ、異端誓絶を強制されました。その結果フィレンツェ郊外に幽閉させられましたが、『新科学対話』（1638）をライデンから出版するなど、旺盛な活動を続けました。

「このような闘争は多くの人に信仰と科学とは互いに対立するものであると結論づけさせた」と、第二バチカン公会議の『現代世界憲章』は

“The Warfare of Science” (1876), 森島恒雄訳「科学と宗教との闘争」岩波新書 44 (1939)。

自己批判しております*⁵。1992年に教皇はこの裁判の判決を撤回しガリレオを正式に復権させましたが、これはガリレオが完全に正しく、教会が完全に間違っていたということではありません。当時の科学者の中にもガリレオに同意しなかったものもありました。問題は、教会が聖書の数節の解釈とその伝統的信仰に基づいて彼の科学的記述に反対したことであり、さらに悪いことに、教会がその思想を圧迫しようとしたことなのです。

ちなみに古代イスラエルの宇宙観は次のようなものでした*⁶。宇宙は地下、地上、天の3階層から成り(出エジプト 20:4)、地は深淵の上にあって(詩 33:7, 箴 8:24)、水の上に広がっています(詩 136:6)。地を取り巻く海のかなたの水平線上には遠い島々があり(イザ 40:15, 41:5)、海の果てには永遠の山がそびえ(詩 138:9, 創 49:26)、天の基または柱を支えています(ヨブ 9:6, 詩 75:4)。地の穴を降りて行くと(エゼ 26:20)、地下の黄泉の国に至るわけです(創 37:35)。大空は地を覆い、太陽、月、星は大空を運行します(創 1:14-18)。太陽は夜の間、月と星は昼の間、永遠の山に掘られた住みかにとどまります(詩 19:5-7)。大空の上には天国の海があり、天の水門が開くと雨が降ります(創 7:11)。天国の海の上には、神の住みかである山がそびえ(詩 48:2)、天の上には諸天の天があることになっております(詩 148:4)。後期ユダヤ教ではコスモス・宇宙の考えが芽生えるなど若干の発展はありますが、新約聖書の時代までこのような宇宙観が信じられておりました。

対照的なのが現代の科学的宇宙観です。これは進んだ観測技術の上に、相対性理論、量子力学など物理学を駆使して展開されています。それによれば、宇宙は150～200億年前にビッグバンにより始まりました。高温高密度のプラズマの中で1秒以内に素粒子が分化し、数百秒で軽い元素の合成が起こったとされています。10万年後に、宇宙の温度と密度は十分下がり、陽子と電子が結合して中性の水素原子を形成しました。重力不安定により、小さな密度のゆらぎが大きく成長し、銀河や第1世代の

* 5 “Gaudium et Spes” (1966), No. 36. 長江恵訳「現代世界憲章」(1967, 中央出版社) p.55.

* 6 フランシスコ会聖書研究所訳「創世記」p.290-291.

星が形成され、現在の宇宙の姿へと進化したと考えられています。今後永久に膨張を続けるか、それともある時点で収縮に向かうかは解決されていません。

というように両者の違いはあまりにも大きいといわなければなりません。聖書の宇宙観は大変美しい世界であります。現代人にとってそれ自体を神からのメッセージと考える必要はありません。科学によりわれわれの知識は増えたのです。それはいいのですが、問題はキリスト教の宗教言語が聖書の宇宙観に基づいていることです。「天におられる私たちの父」とか「キリストは天に挙げられた」と言いますが、ロケットで天に昇っても、神様もキリストもおられません。「天」という宗教言語は、科学の言葉ではないのです。とはいえ、「天」ということばが神の超越性を表しているからと言って、主の祈りを、「天におられる私たちの父よ」の代わりに、「すべてを越える私たちの父よ、……」と訳するのがよいのか、大きな問題だと思います。

1.4 進化論

ダーウィンの進化論についてはさらに大きな論争が巻き起こりました。『種の起源』は、創造と人間の自己理解について、キリスト者をはじめ多くの人々が持っていた見方に挑戦しました。現在でも、アメリカの二、三の州では、一部のキリスト者が、学校で進化論やビッグバン理論を教えないよういろいろ画策しております。現ローマ教皇は1996年10月に教皇庁科学アカデミーに書簡を送り、「進化論はキリスト教と反するものではない。」と述べられました*7。このとき、日本のカトリック教会にもかなりの動揺が起こったことは、科学者のはしくれである私にとってショックでした。カトリック教会は、(恐らく一度も)進化論そのものを公式には否定したことはありません。昭和初年に書かれた岩下壮一師の『カトリックの信仰』にもはっきりと書かれています*8。この点について

* 7 Pope John Paul II, Message to Pontifical Academy of Sciences, L'Osservatore Romano (22 October 1996).

* 8 岩下壮一「カトリックの信仰」(1954, 中央出版社。初版は昭和5年) p. 161-162.

は、あとで詳しく述べたいと思います。

以上述べたように、近代科学とキリスト教とは実は非常に深い関係があります。いわば兄弟です。両者の摩擦も、むしろ兄弟喧嘩のようなものだと考えられるのではないのでしょうか。

2 科学と価値

キリスト教と科学の関係を考えるにあたっては、科学とはどんなものかということについても深く反省しなければなりません。

2.1 「科学」の成立

17世紀には、ケプラー、ガリレイ、デカルト、ハーヴィ、フック、ボイル、ハレイ、ペティ、ニュートン、ホイヘンス、マルピギー、トリチェリなど多くの科学者が活躍し、今日の自然科学体系の出発点となりました。しかし、かれらが現在の科学者と同じ意味で科学者だったのかというところではありませんでした。例えば、ケプラーは宇宙の音楽的和声への確信から三法則を見いだしました。ニュートンは神学や錬金術に熱中していました。

これらのことから分かるように、かれらの依拠する対照概念枠は中世のものに近く、今日の科学者のそれとは大きく異なっています。近代科学が、最初から一枚岩として、科学的真理なるものを前提として追求してきているわけではありません。いわば17世紀の科学者は「全知の存在者の中にある真理」を探究していましたが、その後の科学者は「人間の中にある真理」を探究してるのです。それは信仰から理性へ、教会から実験室への転換でありました。つまり、知識を、神聖、特殊、特別な領域から、世俗、一般、普遍の領域へ引きずり下ろす大転換でありました。この革命はある時突然に起こったのではなく、近代の長い歴史の中で徐々に変化して来たと考えられています*9。

* 9 村上陽一郎「近代科学と聖俗革命」(1976, 新曜社)。

2.2 現代科学の仮説性

さらに 20 世紀になって科学はすっかり変貌しました。現代科学は、もはや真理の専売人でさえありません。現代科学には、隠れている「真理」を探し出すという発想は希薄です。1979 年に世界教会協議会(WCC, プロテスタントと正教会の世界団体)主催で、「信仰、科学、未来」という二千人の大国際会議が MIT (マサチューセッツ工科大学) で開かれ、どういうわけか私も (日本基督教団の推薦で) 参加しましたが、その開会式で当時のボストン大司教のメデイロス枢機卿がこう述べられたのを覚えています。「信仰は真理を宣べ伝える。科学も真理を探究する。真理は一つであるから、両者に矛盾があるはずがない。」いかにもカトリック的な挨拶でした。枢機卿は一時代前の科学像を頭に置いていたものと思われます。「科学が真理を追究するものである」という位置づけが、いつ始まったのかは大変興味のあるところですが、一説によると真理を標榜していた教会への対抗からだということです。

現代の科学者は、自分の研究活動が「真理」を探し出すのではなく、「仮説」を作っているのだということをよく認識しております。研究結果はもちろん客観性を持つものですが、それは、存在論的・本質論的な客観性ではありません。だれでも同じ実験を行えば同じ結果を得るという、方法論的な、機能的な客観性を主張しているに過ぎません。ましてや現代科学は、いつの日にか「最終真理」に到達するなどとは考えません。

2.3 科学と宗教との関係

だからといって、科学と宗教との昔の確執が消滅したというのは、時期尚早でしょう。むしろ両者の緊張と摩擦の性質が変化したといえることができます。聖書が、奇跡とか「神の業」と呼んでいることでも、自然現象として理解できることがあります。しかしそれだからと言って、キリスト者が聖書の物語から何のメッセージをも見いだせないということではありません。

科学とは、人類がこれまで実験、観察、思考によって得た知識の体系です。それが仮説的であると言われるのは、現在の知識がこれまで得られた限られた情報に基づいているからであり、新しいデータが得られれば変更されるかもしれないからです。知識の「正しさ」は、得られてい

るデータを説明できるかによって判断されます。同じ対象に対して二つ以上の理論があったとしても、両方とも実験結果を十分に説明できれば「正しい」のです。どちらが正しいかは、両者が異なる予言を与え、そのどちらが実験に合うかで判断されます。一見、異なる二つの理論が実は同値であったなどということもありました（量子論の、波動力学と行列力学のように）。この意味で、科学は哲学的な意味で「実在」を把握していると考えているわけではありません。

2.4 科学研究と信仰

一昔前のクリスチャンの科学者は、「顕微鏡を覗くと神様が見える」と比喩的に語りました。すなわち、自然の秩序と美を通して神を見たと考えたわけです。一方、現代科学の方法論は仮説的、操作的ですから、現代の科学者は科学的法則性を神的な秩序と見なすことに対してはかなり禁欲的です。

しかし、科学研究は人間の活動であります。従って、他の人間活動と同様に、科学者は科学者としての活動について責任を取らなくてはなりません。たとえ知識の体系としての科学が倫理的に中立であるとしても（実際は、その社会的、文化的、政治的背景を考えると中立と言うことはできません。むしろ、中立であるように努力すべしという目標とでも言った方がいいでしょう）、科学研究という人間活動は倫理的、宗教的次元を持っています。たとえば、ヒトのクローンの実験的研究を考えればよくわかるでしょう。何を研究するか決めるとき、それは人格的な決定です。

時には宗教的思考によってインスピレーションを受けることがあるかもしれませんが。しかし、そうだとしても、知識の体系としての科学研究の成果は、そのような一切の個人的なモチベーションから独立に表現されなければなりません。科学には、科学の次元があるからです。それを、他の次元と混合してはなりません。例えば「ビッグバン宇宙論」と「永続的宇宙論」があったとして、前者の方が「無からの創造」というキリスト教神学に都合がいいから正しいなどと考えてはいけません。また、人類の多元説と単元説（単種説）とについて、単元説の方が創世記の創造物語に合うから正しい、などと考えるといけません。科学は科学の論理で考えなければなりません。

2.5 進化論について

科学とキリスト教との相互関係の一例として、進化論の問題を取り上げたいと思います。進化論とは、地球上に現存する多種多様の生物の種が、別々に創造された永久不変のものではなく、少数の共通の祖先から、長い年月をかけて、次第に変化分岐して今日の姿になったとする科学理論のことです。すでに古代ギリシャ時代において、生物が四元素から発生するという思想（エンペドクレス）が認められますが、近代における生物進化の思想は、18世紀のフランスにおいてはモーペルテュイの『人間と動物の起源』（1745）や、ビュフォンの『博物誌』（1749）にその萌芽が見られます。イギリスではE. ダーウィン（C. Darwin の父）や H. スпенサーの進化論が、またドイツではゲーテの植物変態論がありますが、いずれも哲学的な考察にとどまっていた。具体例に基づいて最初に生物の進化を体系的に唱えたのは J. B. ラマルクで、かれは用不用説と獲得形質の遺伝による進化を主張しました。

生物進化の事実を近代科学の方法に従って多くの証拠を挙げて証明し、統一的な進化の機構を提唱したのは C. ダーウィンであります。かれは『種の起源』（1859）において、生存競争と自然淘汰に基づく進化の機構を提唱し、漸進的な変化の集積によって種が生れると主張しました。本書の初版では「進化」という語は用いず、「変化を伴う継承」という語を使っていますが、第6版（1872）になって初めて「進化」という語を使用しました。本書は自然選択を神の設定した法則と位置づけましたが、進化論の受容は旧約聖書『創世記』の創造物語を否定することになるので、キリスト教と敵対する学説とみるものも少なくありませんでした。本書は、天地創造物語を文字通り信じていたビクトリア朝時代の中産階級の人々のキリスト教の伝統的な信仰に対する大きな衝撃となりました。

進化論は生物に対する見方に大きな変革をもたらし、生物に見られる合目的的現象を、人間をも含めて、目的論的ではなく機械論的に理解する方向を示しました。また進化の一般的概念は、世界の物事への歴史的な見方を促し、本質論的な考え方を批判する視点を示しました。社会思想への影響としては、社会的ダーウィニズムや（広義の）社会進化論があります。スペンサーは人間の社会に進化論を応用し、生存競争、適者生存、淘汰によって社会が進化すると主張しました。社会的ダーウィ

ニズムは南北戦争後のアメリカに受け入れられ、経済社会への国家の介入は出来るだけ避けるべきであるとされました。他方ドイツの E. H. ヘッケルは、世界のすべては一元的なものの進化生成発展であるとする強力な一元論を提唱し、生得的能力差と生存競争が人間社会の基本であるとししました。

2.6 なぜキリスト者は進化論を嫌うのか

私は4つのポイントがあると思います。

1) まず進化論が創世記の記述と矛盾するということがあります。いわゆる創造論者は、宇宙は創世記の冒頭の何章かに書いてある通り、約6000年前の6日間に、現在あるとおりに創造されたと主張します。しかし創世記は当時の知識に基づいて世界の始まりの物語を記したわけであり、従って創世記のメッセージが宇宙の始めに関する科学的説明を与えることでないことは自明でありましょう。

2) 次に、進化論が人間の尊厳を基礎づけないという問題があります。創造物語が科学的説明でないとしても、「神は、ご自分にかたどって人を創造された。」(創世記1:27)とか、さきほど申し上げたように、「産めよ、増えよ、地に満ちよ、地を従わせよ」(1:28)などの語句に表されているように、地上において人間が「神のかたどり Imago Dei としての」特別な地位を占めているという記述、つまり人間中心観は、創世記が我々に伝えたいメッセージと言えるのではないのでしょうか。

しかしここに大きな問題があります。というのは、このメッセージは進化論以来の現代科学の生命観とは全く異なるものだからであります。二重らせんの発見から、ヒトゲノムの解読終了までの現代生物科学の発展は、生命が、たとえいかに合目的に見えようとも物質の機能であり、その働きは原理的に物理・化学によって説明できることを示してきました^{*10}。DNAは生命の設計図であり、それを解読することにより、生命の機能を明らかにし、ひいては医療や創薬にまで役立てようとしています。この観点からは、いのちは他の物質以上の存在ではなく、ヒトを他の動

* 10 Jacques Monod, "Le Hasard et la Necessite" (1970), 渡辺格・村上光彦訳「偶然と必然」(1972, みすず書房)。

物あるいは植物から本質的に区別する科学的根拠はありません。当然のことながら、生物学からは、神から与えられた人間のいのちの尊さ、人格の尊厳、自由と罪などを基礎づけることはできません。

ここに、創造論者ではなくても多くのキリスト者が、進化論や現代生物学を胡散臭く感じる理由の一つがあります。教皇ピオ 12 世は、回勅『フマニ・ジェネリス』（1950）において、進化論を科学上の仮説として受け入れると述べられましたが、同時に人間の靈魂は神によって直接創造されるということを強調しております。現教皇も、さきほど触れた「進化論は今や仮説以上のものである」と述べた科学アカデミーへの書簡においてもこのことを再度強調しておられます。これにより、ヒトの肉体は進化の過程によって成立したとしても、人間としての尊厳は靈魂の存在により根拠づけられることとなります。ただ私としては、霊肉二元論をここまで露骨に強調することが「いのち」の尊厳を基礎づけるために適切かどうかについては疑問が残ります。

3) 三つ目の理由は、もし偶然の突然変異と自然淘汰によって生物が進化してきたとすると、神様の出番がなくなってしまうのではないか、という批判です。だから、進化論は無神論的で嫌いだというわけです（そんな議論をするなら、物理学や数学だって神様の出番はありません）。この考えは私にはどうしても理解できません。偶然と選択による進化だって神の創造の業ではないでしょうか。欧米の神学の中には、偶然は神の業というより悪魔の業とするような見方があるように思われます。むしろ、進化の頂点にある人の霊肉全体に、神の栄光を見るような神学を期待しております。

4) 四つ目の理由は、さきほど述べたように、適者生存の進化論が弱肉強食の競争社会と、弱者切り捨てを正当化する、という批判です。これは、社会的ダーウィニズムと言われるもので、進化論を背景にしていますが、科学としての進化論とは別のものです。

2.7 科学と科学主義

以上述べたように、キリスト教の中では、進化論はあまり評判がよくありませんが、科学としての進化論はキリスト教に反するものではないですから、進化論を再評価するような神学が生まれることをわたしは期

待しております。この例から、知識の体系としての科学は、科学に動機づけられたある種の哲学とは区別すべきものであることがわかります。後者をわたしは、「科学主義」と呼ぶことにします。科学と科学主義とは全く別のものなのです。科学主義によれば、人間活動を含む全宇宙は科学によって説明できるので、科学以外には知識の源泉はないと主張します。だから科学は何をやってもよいのです。同時に科学主義は、人生のすべての問題は、いつの日か科学と技術によって解決すると信じています。

150年前日本が国を開いた頃は、ヨーロッパでは啓蒙主義の時代でした。わが国は西欧列強に追いつくために啓蒙主義を導入しました。そのため、今でも啓蒙主義の強い影響を受けています。特にオイルショックまでの日本人は、あらゆる問題は、社会問題にせよ、人間的な問題にせよ、いつの日にか科学技術によって解決すると漠然と考えていました。科学は真理を教えるものであり、その知識は技術としてあらゆる問題を解決できる、これが明治以来の基本構想でした。よく言われることですが、入試のためには詰め込み勉強が要求され、科学は理解するものではなく、暗記するものだとかえ考えられているようです。20世紀以降の現代科学の新しい性格といったことは、キリスト者にもよく理解されていないことは大変残念なことです。

3 日本の宗教事情

科学とキリスト教の問題を扱うにあたって日本の宗教についても考えて見ましょう。

3.1 仏教・神道・儒教

日本は仏教国であると言われます。いや、神道こそ日本固有の信仰ではないか。そればかりか日本は朱子学や陽明学のような儒教の影響も受けております。日本の宗教事情は複雑で、とくに欧米の人々にはなかなか理解されません。

日本は、中国・朝鮮を経由して6世紀に大乘仏教を受容しました。その後9世紀まで、多くの僧が中国に渡り仏教を勉強して吸収しようとし

ました。しかし、13世紀になると独自の日本的な仏教を定式化しようとする動きが起こり、今日の日本の様々な宗派が誕生しました。日本は、日本が理解した日本化した仏教を信奉しているのです。

同様に、儒教も中国や朝鮮半島の儒教とは違います。日本人の勤勉さは儒教の影響だと言われますが、やはり韓国や中国・台湾の儒教とは違います。

3.2 神仏混淆

わたしが日本の宗教事情について一番問題だと思うことは、神仏混淆という重層的な宗教のあり方です。例えば、平成10年の文化庁の諸宗教の信徒数の統計では、神道系1億600万、仏教系9600万、キリスト教系180万、諸教1100万で、合計すると2億人を越えます。日本は大変「宗教的な」国民なのです。それというのも、仏教寺院は檀家の人数を信徒数として申請し、神社は自分の地域の全人口を氏子として数えているわけです。

欧米人にとっては、一人の人が二つの宗教に属しているなどということとは信じがたいことです。しかし日本では、7世紀に仏教を受け入れたとき、仏教と神道とを同一視する「本地垂迹説」という理論が唱えられました。これによると、神道のこれこれの神は仏教のこれこれの菩薩に対応するというわけです。現在でも、日本の多くの家庭では仏壇と神棚が同居しています。

それだけではありません。16世紀にキリスト教が日本にやってくると、キリスト教と仏教を混合しようという考えも現れました。幸か不幸かそのような試みは成功しませんでした。多くの日本人にとって、「宗教」といえば仏教のどれかの宗派のことなのです。日本は八百万（やおよろず）の神の国ですから、うっかりするとキリスト教の神も800万1番目の神とされてしまう危険があります。もちろん逆に、欧米語ではreligionとはずばりキリスト教を指すのですが。

3.3 宗教と現世利益

日本人にとって「宗教」とはどんなものでしょうか。多くの普通の日本人にとって、宗教とは心の平和と、現世の幸福を与える何かなのです。

仏教は本来現世の幸福への願いを煩悩としてそこから解脱させるはずなのに、日本では（あるいは中国が発端かもしれませんが）現世の幸福を求める宗教になってしまいました。

このことはキリスト教にとっても他人事ではありません。多くの日本人の信徒にとって、キリスト教も現世利益を求める宗教になってしまっているのです。ある教会である婦人が、「〇〇さんはお祈りが上手だから息子が入学試験に合格した。」と言っているのを聞いたことがあります。もちろん聖書にもあるように、真に必要な迫られた人が地上の幸福を祈ることは正しいことです。しかし、それはあくまで神の自由な恵みであって、祈りと引き替えに得られるようなものではありません。祈りは魔術ではありません。もちろん自覚した仏教徒のなかには、現世利益は方便 (upaya) であって、これはブッダからの自由な恵みであることを自覚した人はいます。しかし全体的には、日本の仏教は（そして神道も）現世利益を求める宗教性が濃厚です。

4 おわりに

以上雑駁ではありますが、現代日本における科学と宗教をめぐるいくつかの問題を見て参りました。ここから日本におけるキリスト者たる科学者には3つの使命があると考えられます。まず第一には、さきほど強調した現代科学の特質を人々に伝えることが大事です。もちろん、これですべての問題が魔法のように解決するわけではないことは言うまでもありません。まず、啓蒙主義的な科学像、すなわち科学とは、教科書に書かれた固定した法則の集積であるというような見方（それがいわゆる「理科離れ」を起こしている原因でもあるわけですが）を修正する必要があります。科学とは日々新たにされるダイナミックな研究活動そのものなのです。今日の結果は、明日の発見で覆されるかもしれません。このような科学の仮説的性格の認識なしに、科学と宗教との関係を正しく理解することはできません。

次に重要なことは、とかく科学技術は今日の社会的人間的混乱の元凶だと考えがちな聖職者や修道者や神学者に異議を申し立てて行かなければなりません。彼らが批判しているのは科学ではなく、科学主義なので

す。科学と科学主義との違いを理解していただく必要があります。

最後に、私たち科学者は自分たちに対しても批判の目を向けなければなりません。知識体系としての科学が精神的な価値と独立なものであるといっても、私たちが研究のために行うことすべての責任は自分たちにあります。科学者は、知識の体系という面だけを見るので、とかく人間的また倫理的な責任という面を忘れがちです。わたしたちは、科学研究者のなかにそのような議論を起こす責任があるのです。